8 昔のくらしとまちづくり

わたしたちが住む雨竜町には神楽という伝統行事があります。この伝統行事は、いつごろからはじまったのか、調べてみましょう。

▲神楽 1966（昭和 41）年

雨竜神社は、雨竜のまちが開かれて間もなくつくられ、毎年6月と9月にお祭りが行われます。昔のお祭りには、神社のけいだいにたくさんの出店がならび、すもう大会やしばいなど、いろいろな行事が行われ、大人も子どももみんなで一日を楽しくすごしました。

▲昔のすもう大会の様子

次のことに注意して、写真を使って、
まちの今と昔をくらべてみましょう。

① 変わらない所はどこか。

② 変わった所はどこか。

③ どのように変わったか。

▲今の雨竜市街の様子

▲昔の雨竜市街の様子

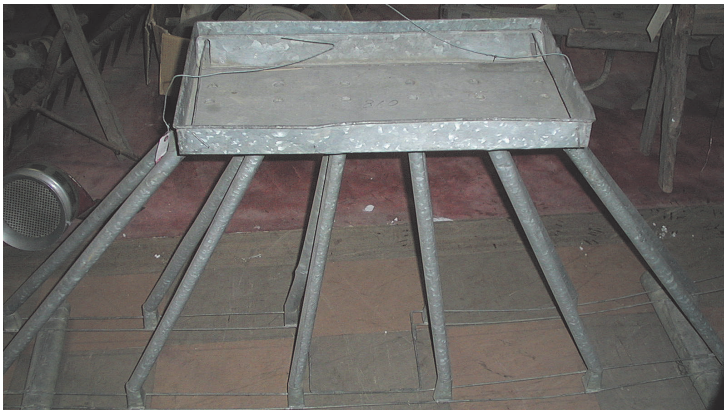
1 雨竜町の昔のくらし

昔、使われていた古い道具を調べてみましょう。

(1) どうやって使ったのかな？

わたしたちは、館長さんに、資料館の案内をしてもらいました。

▲俵編み機



▲たこ足直まき機

▲水田の除草機

▲万石

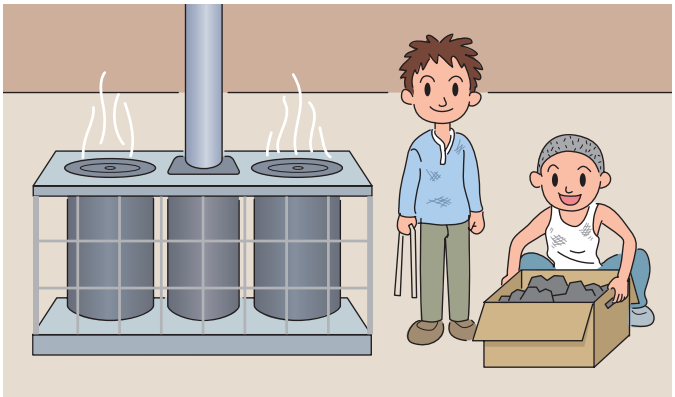
▲コークスストーブ

(2)　くらしはどう変わったのだろう？

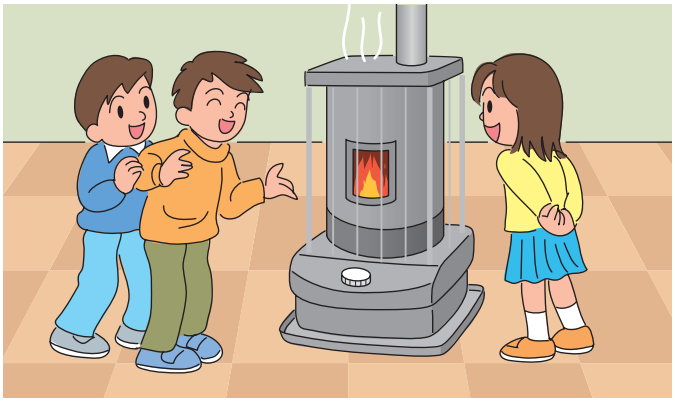
はるなさんたちは、ストーブのうつり変わりについて発表しました。

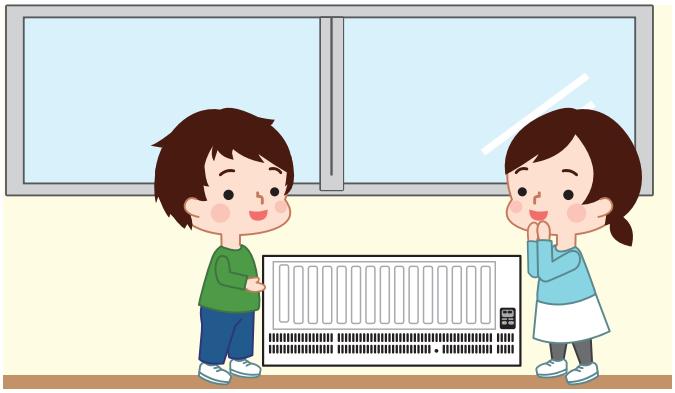
ほかのいろいろな道具とくらしの変化についても調べてみましょう。

古い道具が使われていたころの、くらしの様子を調べましょう。



古い道具で使い方がわからないものは、お年よりに聞いてみましょう。



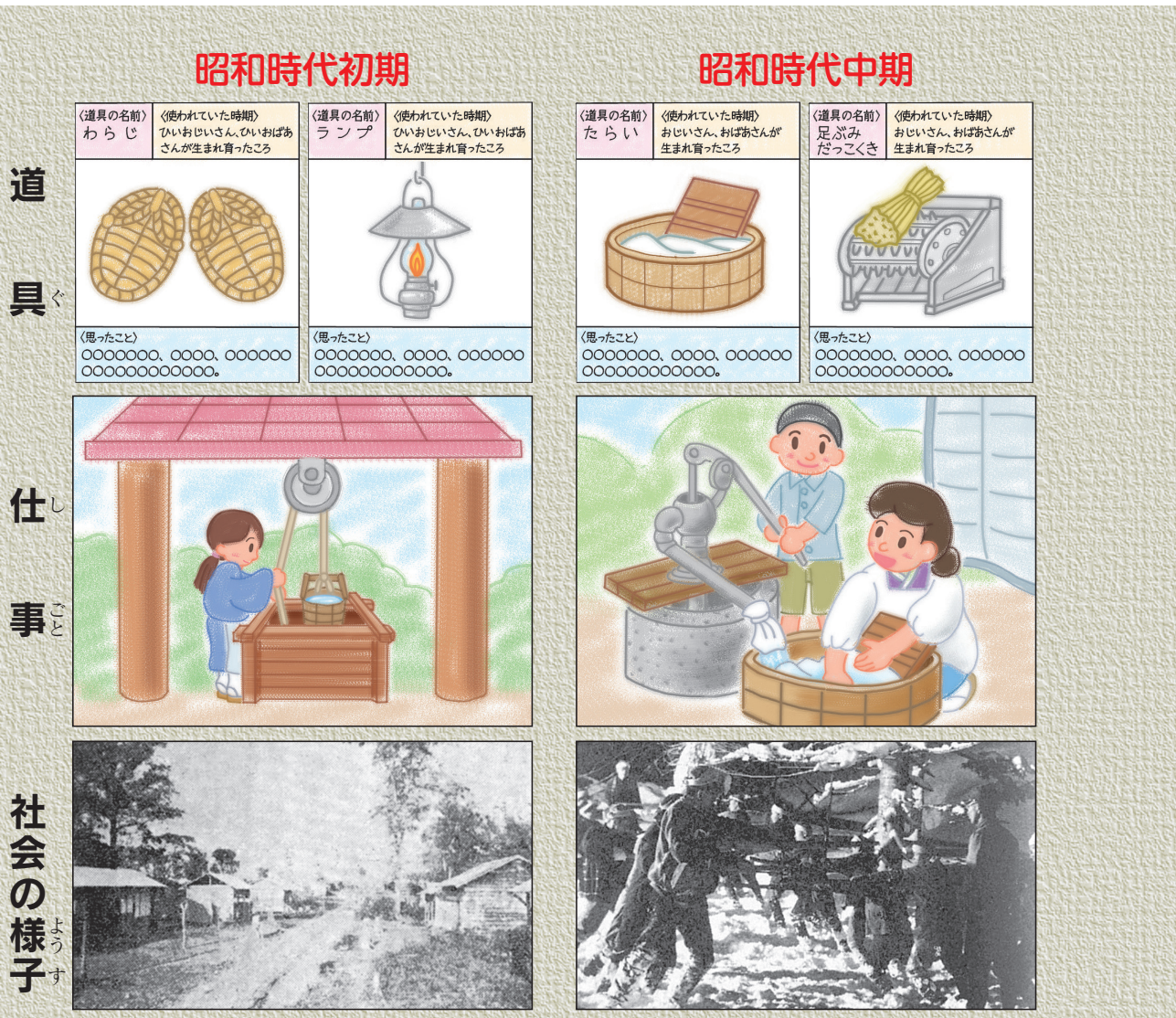


道具のうつり変わりをもとにして、絵年表をつくりましょう。

(3)　絵年表をつくろう

わたしたちは、自分たちでかいた絵カードを古い順にならべて、道具のうつり変りの絵年表をつくりました。

絵年表には、仕事の様子についても調べて書き入れることにしました。



▲雨竜市街（1897 年）

▲じゅうけんじゅつのくん練

〔絵年表のつくり方〕

① 年表を４つの時期に分ける。

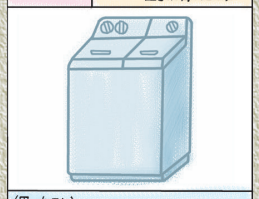
② 調べたことを、左から右へ古い順にならべる。

③ 道具のうつり変わりのほかに、仕事の様子やそのころの社会の様子なども書きこむ。

④ 絵カードや写真をはって、年表をまとめる。

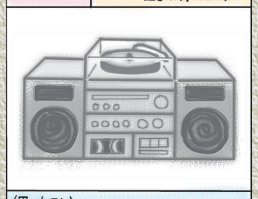
昭和時代後期

〈道具の名前〉せんたくき
〈使われていた時期〉お父さん、お母さんが生まれ育ったころ

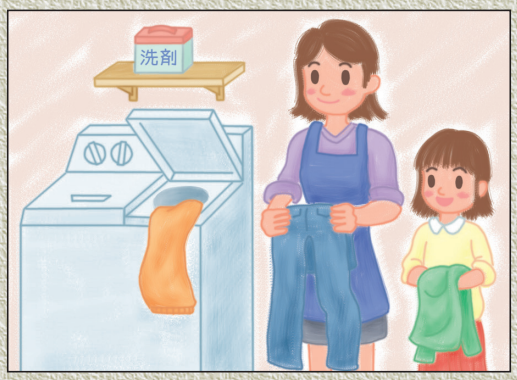


〈思ったこと〉
○○○○○○○、○○○○、○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○。

〈道具の名前〉ステレオ
〈使われていた時期〉お父さん、お母さんが生まれ育ったころ



〈思ったこと〉
○○○○○○○、○○○○、○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○。



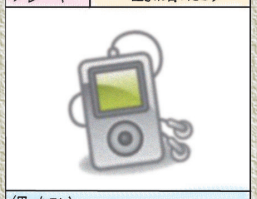
▲昔の道路

平成時代

〈道具の名前〉ぜんじどうせんたくき
〈使われていた時期〉わたしたちが生まれ育ったころ

〈思ったこと〉
○○○○○○○、○○○○、○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○。

〈道具の名前〉デジタルオーディオプレーヤー
〈使われていた時期〉わたしたちが生まれ育ったころ



〈思ったこと〉
○○○○○○○、○○○○、○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○。

▲小学校のパソコン室

2 雨竜町のうつりかわり

華族とはどのような人たちのことか調べてみましょう。

▲開拓のころの原野

(1) 雨竜町を開拓した人々

① 村のたんじょう

雨竜の原野を開拓しようと計画をしたのは、三条実美、蜂須賀茂韶、菊亭修季たちの華族でした。

1889（明治22）年、三条実美は華族組合を作り、アメリカのような大農場を作ろうと考えました。そして1890（明治23）年から開拓が始まりました。

開拓が始まったころの雨竜は、川の近くに大きな木がどこまでもたくさん生えていました。また、熊ささがびっしりとしげっているので、仕事が思うように進みませんでした。

北海道の開拓の様子を調べて歩いた川上十郎は1890（明治23）年、このちいきに来たときのことを日誌に記録していました。

川上十郎さんのお話

滝川村（滝川市）をたって新十津川村（新十津川町）をだいぶすぎたころ、かんしゅがサーベルに手をかけて囚人をはたらかせて増毛道路をつくっていました。石狩川の岸では、メノコ（アイヌの女の人）が三人、舟にのってじゅんさい（水草の種類で、若芽や若い葉を食べる）を取っていました。

オシラリカ川をわたって少し行くと、熊ざさの中に入ってしまい、ようやく雨竜農場事務所をさがしあてました。事務所のそばには、機械そうこや、物置小屋がたてられてあり、あちこちの畑で、みんながまっ黒になって働いていました。四頭引きの牛を使い、メリメリと木の根をほり起こした様子は、すさまじさと力強さを感じさせられました。

「４０日あまりで１４８ヘクタールの土地を開きました。みんなが力を合わせて、よく働いてくれるので、どんどん畑が広くなっていきます。」と支配人の町村金弥が話しながら、植えつけのすんだ畑をあんないしてくれました。とうきび、えんばく、だいず、しょうず、そさい、ばれいしょ、春まき小麦、ドイツ小麦、アメリカ白小麦などが、ぐんぐんのびていました。

「飲み水は、石狩川でくんで、馬車で運び、こして使っているのです。」と係の人が話しました。（８月１５日　記）

「雨竜町１００年史」より

ところが、1891年（明治24）年、三条実美が病気で死んだので、華族組合はかいさんすることになりました。

華族組合農場がかいさんした時、雨竜の土地は蜂須賀・戸田・町村の３人でわけて、農場としてやっていくことにしました。

1892（明治25）年、雨竜は北海道庁から村としてみとめられました。市街は尾白利加波止場のところにありました。

▲開拓当時の雨竜市街

1898（明治31）年の水害で、川が浅くなり、汽船が行き来できなくなりました。そこで、1900（明治33）年、雨竜市街は今の場所にうつりました。

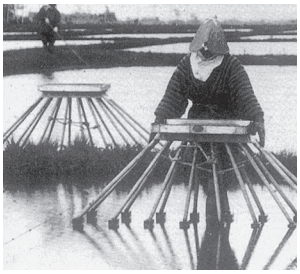
② 米作り

▲大正のころの田畑のようす
1921（大正 10）年

昔は、今使われているような機かいがなく、人や馬の力で仕事をしていました。

▲田おこし

馬を使う道具もたくさんあり、馬が農家の仕事を助ける大きな力になっていたこともわかります。大切な米を手に入れるためには、石狩川を下り、滝川で交かんしなければなりませんでした。そこで農場では畑の作物中心から、米作りに力を入れていくことにしました。1897（明治30）年から本かく的に米作りをはじめました。



▲たこ足直まき

▲しろかき

働く人もたくさん必要でした。富山県や香川県、兵庫県などからもたくさんの人たちが移ってきて、米作りは農場全体に広がっていきました。

▲国領に移住した人たち

1921（大正10）年には、農場の数

は900戸になりました。

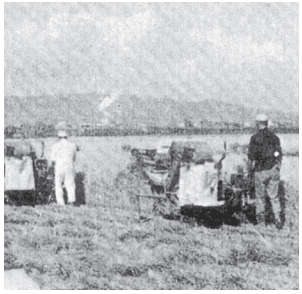
米作りには水が必要です。そのために、農場では水門や水路を15万円のお金を出して5年間もかけてつくりました。

1俵は60kg、約20円

米作りの仕事はほとんどが手仕事でした。子どもたちもいそがしいときは学校から急いで帰り、家の手伝いをしました。

人びとの努力で1900（明治33）年、初めて農場は黒字になりましたが、人々のくらしはけっして楽ではありませんでした。

人と馬による米作りも60年ほど前から、春の田おこしにはこううん機を使い、その後、田植えやいねかりにも機かいが使われるようになりました。



▲最初のころの機械によるいねかり

年表

西暦	年代	年	出来事
1888	明治	22	三条実美が華族組合をつくる
1890		23	開拓が始まる 川上十郎が雨竜をおとずれる
1891		24	三条実美が病死
1892		25	雨竜村のたん生　市街は尾白利加波止場
1897		30	本かく的な米作りが始まる
1898		31	水害で川が浅くなり、汽船が行き来できなくなる
1900		33	市街が今の場所に移動
1921	大正	10	農場の農家は９００戸

▲戦時中の子どもの写真

③ 戦争のころ

1937（昭和12）年、雨竜では、働き手の男の人たちが次々と戦地へ行ってしまいました。農家では、女の人やお年よりたちで、田畑の仕事をしなければならなく大変でした。

戦争が終わった後の雨竜の人たちはどのようなくらしをしていたのでしょう。

④ 戦争が終わって

1945（昭和20）年８月、日本は負け、たくさんの命をうばった長い戦争がやっと終わりました。

この年の秋は天候が悪く、米はほとんどとれませんでした。

調べましょう。
○ 農地改かく
○ 外地

やがて、政治や教育、農業の仕組みが新しく変わっていきました。今まで農場に小作料をおさめて土地を借りていた人たちも、「農地改かく」でみんな自分の土地を持てるようになりました。

▲雨竜市街 1945（昭和 20）年

また、外地から引き上げてきた人たちが、開拓地を求めて牧岡の植林地1500ヘクタールを開放するように農場や町などにたのみました。1947（昭和

22）年にはその願いがかない、人々は木を切りたおした所などを、少しずつ開拓して田畑を作りました。

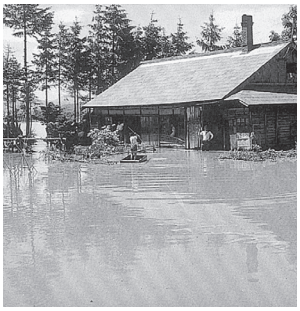
⑤　くらしを高める

わたしたちのまちには、いくつもの川が流れています。

川の水はわたしたちの生活と深く関わり大切なものですが、毎年のようにおとずれる洪水は昔の人々をなやませつづけました。昔の人々は、洪水をふせぐためにどのような工夫をしたのでしょうか。

1898（明治31）年～1962（昭和37）年の間に記ろくにのこっているものだけでも17回の大洪水が起きています。

▲ 1953（昭和 28）年の大洪水



▲1975（昭和 50）年の水害

1955（昭和30）年には２度も水害が起きました。みるみるうちに家や田畑を水びたしにしてしまいました。米はひとつぶも実らず、かり取ったいねはそのままもやしてしまいました。

1975（昭和50）年には尾白利加川の水があふれて、川の近くの家が水につかったり、どろ水や石にうずめられて大きな被害を受けました。まちでは、このようなおそろしい水害をふせぎ、町民の安全なくらしを守るために、国の力を借りて治水工事をすすめることにしました。

① 堤防を高くして、川の両岸をコンクリートで固める。
② 曲がりくねった川を切りかえて水の流れをよくして、洪水によるはんらんをふせぐ。
③ 尾白利加川の上流の谷間に砂防ダムをつくり土砂崩れをふせぐ。

▲治水工事

また、農業を中心として発展していくうちに、水田に必要な用水が足りないことが問題になってきました。そこで1945（昭和20）年、「尾白利加川ダム（暑寒湖）」を建設しようという声が、まち全体に広がりました。

1949（昭和24）年、当時の村長さんや村の代表の人たちが集まりダム建設のために国などに働きかけました。

▲尾白利加ダム（暑寒湖）

1957（昭和32）年、「尾白利加川ダム（暑寒湖）」をつくる工事が始められました。1966（昭和41）年、ダムは19億円のお金をかけて完成しました。このダムのおかげで、水田に必要な用水が今までの水田約1900ヘクタール分と新しい水田約1000ヘクタール分として使えるようになりました。

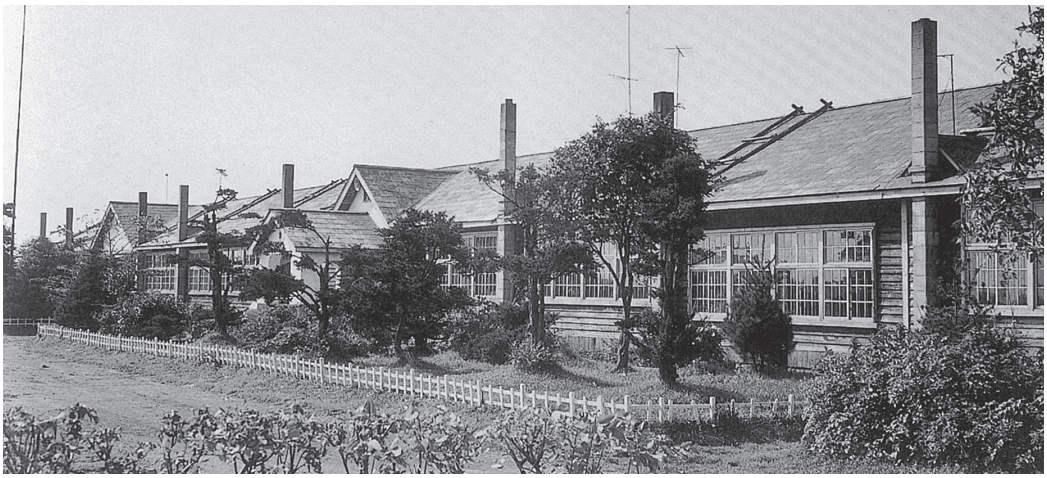
▲ダムのしゅすいとう

ダムができた

今でも忘れることができないのは、水不足です。特に、昭和13年の水不足は深こくでした。6月中じゅんから水がこなくなり、用水組合長をしていたわたしは用水路の見回りをしたり水門の開けしめに走りまわる日々が続きました。そのため、自分の仕事は全くできなくて、本当にこまりました。家に残された者は、いくら働いても草取りの仕事がおくれて、水のない田んぼは雑草だらけになり、水不足と仕事のおくれで心も体も休まりませんでした。

今はダムができて水も十分あるので、ずっと楽になったと思います。

「雨竜町100年史」より

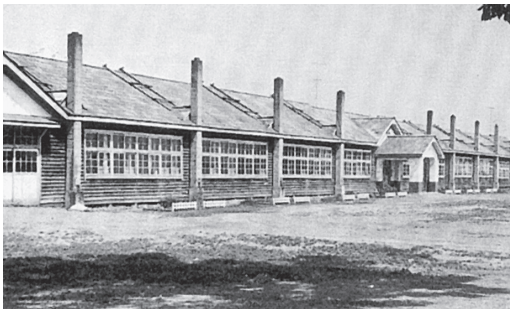


▲昔の雨竜小学校

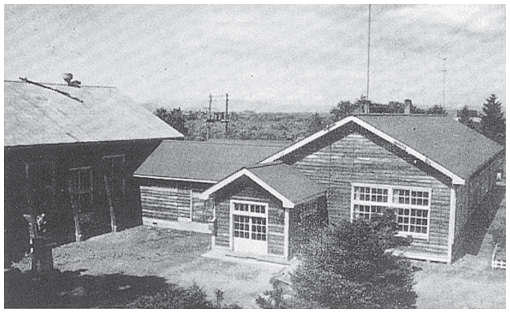
⑵　学校のうつりかわり

上の写真は、雨竜小学校が改善センターの所にあったころのものです。木ぞう平屋の校しゃで、今の校しゃとはだいぶ様子がちがっています。

今、雨竜町には小学校が１校しかありませんが、昔は雨竜小学校、雨竜橋小学校、渭ノ津小学校、牧岡小学校、川上小学校、国領小学校の６校の小学校がありました。



▲雨竜橋小学校



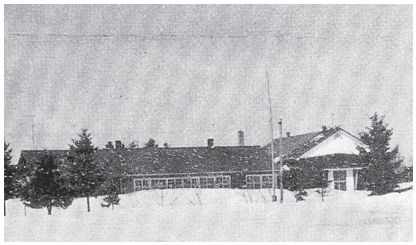
▲渭ノ津小学校

統合した学校を建てるには広い土地が必要だったので、田畑だった場所（現校舎から国道をはさんだ向かい側）に、校しゃを建てました。そこで、学校まで遠くなった人のためにスクールバスを走らせることにしました。統合となる前には、それぞれの学校に何人ぐらいの児童がいたのでしょうか。

	大正の頃 1921 (大正10)年	太平洋戦争の頃 1941 (昭和16)年	1つの学校になる頃 1968 (昭和43)年
雨竜小学校	636（人）	674（人）	309（人）
雨竜橋小学校	293	380	174
渭ノ津小学校	60	60	55
川上小学校	83	83	31
牧岡小学校	―	―	25
国領小学校	40	18	9
合　計	1,112	1,215	603

▲町内の児童のうつりかわり

▲川上小学校



▲牧岡小学校

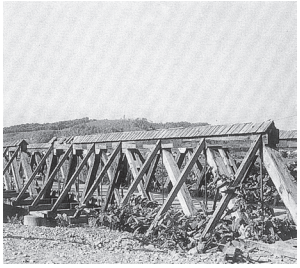
▲国領小学校

2014（平成２６）年には、現校舎の小・中学校併設校となり、現在にいたります。

▲雨竜小学校（旧校舎）

▲雨竜小・中学校（現在）

(3)　交通のうつりかわり


▲昔の橋

村が開かれたころは、木を切ったり、熊ざさをかったりしただけの道路をつくり、ぬま地には5、6本の丸太をならべて、その上に木のえだや熊ざさをしき、土をかぶせて土橋をつくりました。

▲鉄道の開通をよろこぶ人たち

雨竜町にも、鉄道が通っていたことがあります。札沼線といって、札幌市から沼田町まで続いていました。明治時代からの願いがようやくかない1935（昭和10）年に開通しました。

ところが、戦争に使う鉄が足りなくなったため、1944（昭和19）年にレールが取りはずされてしまいました。鉄道が使えなくなったため、春から秋までは、滝川までバスが通るようになりました。しかし、冬の間は江部乙までの客馬そりしかなく、乗れない人は歩かなければなりませんでした。

▲昔のバス

戦争が終わり、1956（昭和31）年に、ふたたび列車が通るようになりました。町内には、雨竜駅、石狩追分駅

のほか、南雨竜や中雨竜、渭ノ津などの乗こう場もできました。

しかし、10年ほどたつとバスやトラック、自家用車による交通が発達し、鉄道の利用がだんだんとへっていきました。

▲昔の雨竜駅

1965（昭和40）年に7年がかりでつくった江竜橋が完成し、大きな車で大ぜいの人やたくさんの荷物を運べるようになりました。

▲現在の江竜橋
（2011 年完成）

ついに1972（昭和47）年、新十津川から沼田町までの鉄道がはい止され、雨竜町から鉄道はなくなりました。

そのころから国道や町道は広くなり、ほそうされ、歩道もつけられるようになりました。

▲今の道路

こうして雨竜町はバスやトラックで他のまちと結びつき、べんりの良い住みやすいまちとなってきたのです。

3 地いきで受け継がれてきたもの

身近な地域を見直そう

そうすけさんたちは、地いきに古くから残るものを受けついていくために、自分たちに何ができるか考えることにしました。

「古いものは、どれもいろいろな人が大切にして伝えていたね。」

「暑寒連山太鼓や獅子神楽もそうした取り組みに一つではないかな。」

暑寒連山太鼓保存会の方のお話

雨竜の新しい郷土芸能として昭和56年に結成され、昭和57年に公民館で町民の方々へ迫力あるたいこがひろうされました。保存会員の減少とともに、一時活動が少なくなりましたが、現在は、子ども会員が増加し、活動も活発になりました。

暑寒フェスタや町民文化祭などで町民の方々に元気になってもらえるよう活動を続けています。

暑寒連山太鼓の写真

獅子神楽保存会の方のお話

明治41年に富山県から移住した人達によりつくられました。昭和12年戦争によって中断されましたが、昭和34年に復活し、今まで続いています。町外への活動が広がるとともに、神楽発祥の地「入善町」との交流も深めています。

現在は，雨竜神社秋祭りや町民文化祭などで、町民のみなさんにひろうしています。

獅子神楽の写真

暑寒別連山太鼓を体験しました

◎バチの持ち方やたたきかたを教えてもらいました。
◎みんなとリズムを合わせるのがむずかしいですが、楽しかったです。

そうすけさんたちは、古くから残るものを受けつぐ取り組みに、より多くの子どもたちが参加するためにはどうしたらいいか、話し合いました。

「実際に体験してみて、自分たちが感じた楽しいところや、やりがいをまわりの人に伝えることが大事だね」

「ポスターをつくって、学校や地いきで宣伝してみたらどうかな。」

獅子神楽を
いっしょにやりませんか？

きれいな衣しょうで
楽しくおどったりしよう
わたしたちの郷土芸能を守ろう